

# 河北潟 かほくがた



N P O法人河北潟湖沼研究所通信

2007. Vol.13 No.2



舟入川の面影を残す「馬渡川（まわたりかわ）」の風景。

## 草取りをした馬渡川のその後

昨年、環境省のいきづく湖沼ふれあいモデル事業において、馬渡川の水路に繁茂するチクゴスズメノヒエの除去作業をおこないましたが、約一年を経過した現在の状況を確認しました。

水の流れを妨げる植物やゴミはなく、水路の水はよく流れていました。水際にはクサガメがいて、人影に驚いて水中に入り、水辺の草陰に隠れました。水が濁っていないので泳ぐ姿がよく見えました。川端からは水面がよく見え、昨年の9月の時とは様変わりしました。

しかし一部では、取り残したチクゴスズメノヒエがひろがりを見せており、水辺に群落が確認されました。放っておくと、また水路を覆う

ようになると思われます。水路や川を良い状態に保つためには、継続的な活動が必要です。

昨年この活動を行ったときには、地元の人の反応は少なかったのですが、現在のチクゴスズメノヒエがなくなった水路を見た地元の人たちから、こうした地道な草取り活動が効果があって良いという声も聞かれるようになりました。



2006年9月



2007年10月

## 河北潟から消える風景

11月初めより2008年の河北潟カレンダーの販売を開始します。今回のテーマは、「消える風景」です。時の流れとともに風景は変化するものですが、河北潟地域は、干拓前後から現在まで、あまりにも急速に風景を変えてきました。人のくらしと環境とのバランスや、将来の持続可能な河北潟地域を考える上で、消えつつある風景に思いを重ねてみるのも大切なのではないのでしょうか。そんな思いを込めて製作した2008年カレンダーは、河北潟湖沼研究所友の会会員に1冊づつ配布されるとともに、定価630円で販売致します。お申し込みは、河北潟湖沼研究所金沢事務局（最後のページ参照）まで、よろしくお願致します。

以下に、カレンダーに採用された写真のいくつかを解説とともに紹介します。

### <表紙>

西部承水路にはハスの大群落がありました。承水路は、河北潟の湖岸の名残で



す。最も上流側に、水路がすこし広がっている場所があり、両岸に抽水植物が繁茂して、昔の河北潟のおもかげが残っています。ハスは初夏から真夏にかけて、大きな丸い葉を一面に拡げて白い花を咲かせていましたが、数年前に一斉に消えてしまいました。（撮影 熊倉雅彦氏）

### <2月>

河北潟では、津幡川の河口や金腐川の河口などの一部の場所を除いて、湖岸



のヨシが衰退しています。原因には、地盤沈下や潟への土砂の供給の減少など、いろいろと考えられ、全国の湖でも同様の傾向がみられるようです。これは、群落から孤立して株化したヨシです。何となく風情があるようにも見えますが、実は寂しい風景です。（撮影 高橋 久氏）

### <3月>

かつての東蚊爪の農地の風景です。河北潟の周辺に残っていた唯一のハサ木で



した。ハサ木は刈り取った稲を干す場所です。舟入川を行き交う稲を積んだ舟とハサ木にかけられた稲束は、河北潟の秋の風物詩でした。舟入川が農道に替わり、コンバインでの収穫となり、ほ場整備に伴って、残っていたハサ木も切り倒されてしまいました。（撮影 白井伸和氏）

### <6月>

河北潟に夏を告げる鳥には、オオヨシキリとともにコヨシキリが



います。オオヨシキリがヨシ原を好むのに対して、コヨシキリはもう少し背の低い草地を好みます。干拓地の休耕地が少なくなり、管理が行き届いてきたことで、コヨシキリの姿はめっきり減りました。今はもうほとんど出会うことのできない風景となりました。（撮影 中川富男氏）

### <9月>

農薬の使用が減ってきているのか、一時はほぼ消滅したかに見えた河北潟のミズアオイです



が、種子は土の中でじっと機会を窺っていたようです。最近ではハス田や水路で、ちらほらと紫の花を見ることができるようになりました。まれに大きな群落をつくっているのも見かけます。河北潟のなかに戻ってきた、数少ない風景のひとつです。（撮影 野村卓之氏）

## 第6回 エサキアメンボ

アメンボというと、スマートな体で水面をすいすいと泳ぐ優雅な虫のイメージがありますが、実は肉食性で獲物を捕まえる行動は、かなりの気性の荒さを感じます。アメンボが水面に浮かんでいるときは、決してノンビリしているわけではなく、常にまわりにいる仲間と牽制しあっています。そのためアメンボのいる池や水溜まりをよく見ると、それぞれの個体がほとんど等間隔に距離を保っています。そして、自分の近くに落ちた虫などの餌を、他の個体よりも素早く捉えます。普通、水面にいるアメンボの数とたまたま水面に落ちる餌の数では、圧倒的にアメンボの方が多いので、他の個体よりも多くの餌を捉えるために、水面を滑る方法が発達したのだと思われます。

さて河北潟には、アメンボ（ナミアメンボ）、ヒメアメンボ、ハネナシアメンボ、エサキアメンボ、シマアメンボなど多くの種類のアメンボがいます。

アメンボ（ナミアメンボ）は、潟の中でも岸よりの植生が入り組んだ場所や、排水路などのやや広い水面に多くみられます。ヒメアメンボは、アメンボのいるところでも見られますが、水田でもよく見かけます。ハネナシアメンボはヒシの生えた水路などによく見かけます。シマアメンボは、山地の沢などの流水によく見られる種ですが、河北潟では、干拓地の支線排水路にしばしば見られます。低地である河北潟には、本来シマアメンボの好む流水環境はほとんどないのですが、人工的につくられた支線排水路は、適度な勾配があって水が良く流れているので、そこをすみかとするようになったのだと思われます。

ところで、今回の表題のエサキアメンボは、ヨシ原の中に潜んでいるアメンボです。ヨシ原の多い河北潟の環境を代表する生物のひとつです。アメンボやヒメアメンボと比べると小柄で華奢な体つきをしていて、一見して弱々しいアメンボです。広い水面をヒメアメンボが占拠しているときに、ひっそりとヨシ原のなかに隠れています。そのため、ヨシ原をかき分けて丹念に調べないと見つかることができません。エサキアメンボは全国的にも絶滅が危惧されている種ですが、河北潟でも幻のアメンボとなりつつあります。2001年にそれまで知られていた唯一の生息地であった水路が埋められてしまっからは、しばらくの間、河北潟での生息が確認されていませんでした。やっと最近になって、干拓地内の一角に生息していることが確認されました。

(文 高橋 久)

カコちゃん  
ジロウくん

かいほくかいたナルドレン



## 第2回 潟端の暮らしとともにあった舟

河北潟の東側に位置する集落、「潟端」<sup>かたばた</sup>で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観を呈してた1950年代頃までの潟端の自然と人の暮らしについて聞き書きしています。

舟は、水郷潟端の暮らしとともにありました。秋の収穫期は最もよく使われ、何艘もの舟が行き来しました。稲を干す場所をつくるのにも、収穫した稲束を家まで運ぶときにも舟が必要となります。川端に置いている数十本の稲架木<sup>はさぎ</sup>を、舟で運んで組み立てる作業は、一週間ほどかかる大仕事でした。春先には田んぼを客土するために、川の泥を舟に入れて運びました。また、夏の日照り時に田んぼに水を入れる水車<sup>みずぐるま</sup>（踏車）を運んだり、川端の畑で収穫した野菜をのせて運ぶこともありました。魚を捕りに舟を出したり、物々交換に内灘まで行くのも舟でした。舟は、いまの車や一輪車のような役割を果たしていました。

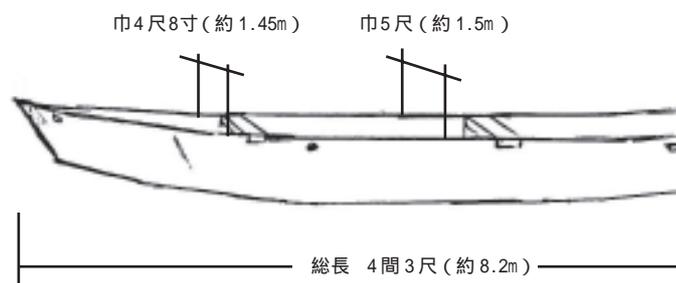
舟道である川は大切にされ、毎年5月からお盆くらいまでに2～3回、川の藻や泥をとりあげました。お盆を過ぎてからも1回おこないましたが、これは稲刈りのときの舟の運航を妨げないようにするためでした。

舟は幼い頃から乗る練習をするので、子どもらはみんな使いこなしていました。舟を漕ぐのにも技がいるもので、下手に漕ぐと、舟と舟があたったり、長い棹があたって音がします。車のない静かな時代で、舟をたたいて遠くにいる人に合図することもありましたから、下手に漕ぐと注目を浴びることになりました。そのため静かに舟を漕げるよう、皆よく特訓していました。夜舟を漕ぐ音は、とくに響き渡り、音をさせると家の中にまで聞こえました。夜に舟が出ると、その音で誰がでていったか大体見当がつくほどでした。

潟端では、八田や内灘のような本格的な漁はほとんどおこなわれず、生活の糧は米づくりにありました。そのため潟端の舟は、稲を運ぶた

めの大きな舟でした。漁をするための八田の舟は棹で漕いでも、スーッと前へ進みますが、潟端の舟は歩く速度より遅いくらいで、ゆっくりと進みます。潟端の舟は総長4間3尺ほど（約8m）でしたが、八田の漁舟は1丈9尺8寸ほど（約6m）と潟端の舟より小さく、海に出るタイプの内灘の舟は最も短くて幅がありました。舟の長さや縁の高さ、反り具合は用途に合わせてできているもので、潟端の舟で日本海に出たら忽ち沈没してしまいます。また稲を運ぶ舟でも、大浦や木越の舟は潟端とよく似ていましたが、川尻の舟はより長く、たくさんの稲を積むことができました。川尻には津幡川など深くて大きな川があり、大きい舟の運航が可能でし

舟の材はクサマキ（ヒノキロ）。スギ材で作られた安い舟だが、スギはすぐに腐るのでなかった。八田と川尻の舟だが、潟端の舟をつくっていた。



左から順番に、潟端で使われた舟、棹、櫓、櫂。手作りなので、サイ人によって少しずつ違っていった。棹は櫓と同じくらいの長さだった

坂野さんが使われていた櫓と櫂は、津幡町歴史民俗資料収蔵庫におさめられていま収蔵庫内は自由に見学することができ、舟や水車、農業用具なども見ることができ

た。河北潟の舟といっても、地域の条件に適した舟がそれぞれ存在していました。

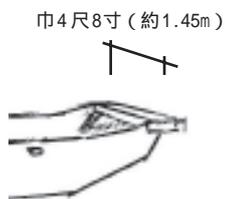
下の絵は潟端の舟と、舟を漕ぐ道具の棹と櫂、櫂です。むかしから「櫂は三年、櫂は三月」といわれ、それぐらい日数を持たないと使いこなせないものでした。櫂と櫂は櫂の木でできているので非常に重たく、潟で落としたりすぐに拾い上げなければ取れなくなりました。櫂は櫂杭に乗せて使うことができますが、櫂は舟の端の櫂穴に縄で結んで漕ぐので、操るのが難しく、体力もいりました。棹は破竹棹で軽いですが、これも使いこなすのに三月くらいかかりました。破竹棹のハチクは、山へ行って良いハチクを自分で選び、地主から買い取って家へ持ち帰りました。3~4kmも歩いて持ち帰るので、持ち運べる分量の4~5本を買いました。ハチクは細くて長いので棹に適し、重宝しました。櫂や櫂は、水深1m以上の深いところに出たときに使うもので、通常は棹で舟を動かします。棹は竹が割れると、水が入って使えなくなるので、舟を止めたときは小まめに日陰に置くなどして、大切に使いました。また潟端では使われ

ませんでしたが、内灘の人が使う海に出るタイプの舟には舵がつけてありました。ただ、潟端の舟でも、潟を横切って内灘まで行くようなときには、帆柱を立てて帆をあげることがあり、そのときは櫂を舵のかわりに使いました。

稲を運ぶ舟で漁をおこなうことは難しいので、本格的に漁をする人は八田に行き、使い古された中古品の舟を買っていました。そのため漁をする家には、稲を運ぶ舟と漁をする舟の2つのタイプがありました。昭和23年の潟端の部落92軒には、80隻の舟がありました。八田の舟を持っている家は4,5軒でした。漁用の舟は多少ひび割れても大丈夫ですが、潟端の舟は乾いた稲を運ぶので、ひびが入らないよう注意しました。雨風をしのげる舟小屋は地主のような人しか持つことができず、潟端の部落には4軒くらいしかありませんでした。たいていの舟は家の前の川に横付けに置かれ、縄で杭につながれていました。川に置けない舟は、空き地に置かれました。舟には薦こも（藁で編んだもの）をかけて、日除けしていました。

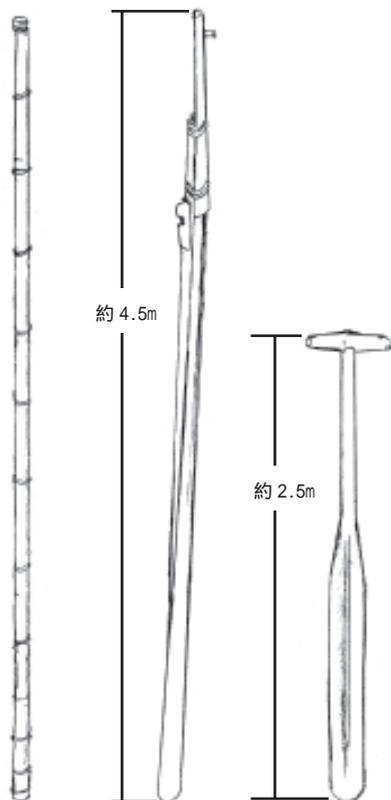
(文・聞き取り 川原奈苗)

はクサマキ(ヒノキアスナギ材で作られた安い舟もあった。アスナギはすぐに腐るので好まれなかった。八田と川尻の舟大工さんの舟をつくっていた。



作りなので、サイズは...の長さだった。

庫におさめられています。...なども見ることができます。



潟端の部落を流れる前川に置かれた舟。昭和40年頃の様子。(撮影：坂野巖氏)

2005年8月19日(続き)

ゴビ・オクトル・ソムの集落を出ると、砂漠と疎らな草原だけだった地平線に遠く黒い岩山が見えてくる。道はこの岩山の中に入ってゆく。岩山地帯に入ると景色が一変する。それまでの平坦地から道は岩山の中の谷間を縫う幅100m前後の疎らに草の生えた砂礫地を進む。谷底は緩やかに起伏し、両側には赤みがかった黒褐色の岩山が盛り上がり連なる。風食のためか角がとれて縦横に割れ目が入った高さ数十mの岩が重なり合った独特の景観である。この岩山の地域は長さ4km、幅1km程もある。峡谷の底の草地には白や紫の花を着けたニラの一種や、黄色い花を着けた棘のある灌木が散在していて、お花畑のようになっている。ざっと見分けただけで花を着けた灌木は3~4種、草も3~4種はある。とくに私の目を引いたのはこの草地から岩山の麓にかけてあちこちに半ば地面に埋もれている大きな丸い岩の表面に張り付いている地衣であった。茶色、黄色、緑色から白までさまざまな色合いの地衣が岩を半ば覆っている。これを見てもこの岩山の一角が周囲の砂漠と違った局地気候を持ち、独特の生態系を造っているらしいことが推察できる。同行のモンゴルの人達の話では、ここだけに野生の山羊(多分オオツノヤマヒツジの類だろう)が住んでいるという。ゴビ砂漠の中に孤立したこの岩山の生態系は、地域の自然の多様性を造る大きな砂漠生態系の一部をなしているものと思われる。モンゴルの人達にもこのようなところは特別な場所らしい。この地名を聞くとイヘ・ガザリーン・チュルーというが、発音が難しく正確には聞き取れない。

ナランツァツアルトさんたちと我々はここで休憩して、酒を飲み、菓子などを食べる。酒は馬



乳酒ではなく町から持ってきた強いウオッカである。飲む前に酒に中指を浸してから空に向かってはじく。これが天の神様へお供えする作法だという。

午後5時頃ここを出てまた砂漠を走る。砂漠のなかの小さな町のガソリンスタンドで給油をする。周りに家がほとんどない砂地にタイルを敷いて給油器を置いた簡単なガソリンスタンドで、手押しポンプでガソリンを入れる。

砂漠の中で車の一台が故障して修理する。修理が終わったのは午後9時頃。ようやく砂漠の地平線に太陽が沈む。少し風が出てくるがあまり寒くはない。気温は27度。

次第に暗くなる砂漠の中を走って、ほとんど何も見えない暗闇の中で小さな灯のついたウーシマンハンの療養所に着いたのは午後10時半だった。この夜は割り当てられたグルに泊まる。



8月20日

朝、7時半、上空はほぼ晴れ上がっているが地平はややかすんでいる。陽はまだ上がらない。少し風がある。北風。グルの内部の気温は22度5、外の気温は21度。

地平線まで何一つない広い砂礫原の中に、療養所の建物とグルの一群だけがある。療養所の背面にやや高い砂丘がある。これがオーシ砂丘である。

砂漠というと一面の砂原あるいは波打つ砂丘の広がりのように思う人が多いが、ゴビ砂漠のばあい固く締まった土と砂礫の平面で、その所々に岩山があり、またこのオーシ砂丘のように細かい砂が盛り上がった砂丘がある。砂丘がある場所は多くないので、このように不便なと

ころに砂丘療養所が設置されているのだろう。砂丘は全体に赤みがかった黄土色で斜面の所々に岩が出ている部分があり、稜線や山ひだの高い部分に孤立した樹木が見られる。砂の斜面にごく疎らに灌木が点在し、砂丘の麓には葉の小さい草が生えている。常識的に考えれば丘陵の低い部分に樹木が、高い部分に草が生えているように思うが、この配列が逆になっているのが

興味を引く。これらの植物は砂礫地では見られない種類で、昨日の岩山と同様に、ここもまたゴビ砂漠の中に独特の生態系を造っていることが判る。風でならされた砂地には、とくに草の株の近くには小型の動物の穴や足跡などの痕跡があって、夜行性の動物がかなり住んでいることが推察できる。ここで動物の生態を調べようとするならば、夜間の観察が重要になるだろう。

## モンゴル環境状況視察の旅...報告 2

2006年8月26日～9月8日の旅  
大館小夜子

2日目、国会議員のチャドラーさん(モンゴル環境)をロシア建築のオフィスに訪ねる。街を走る車は、日本やロシア、韓国などの中古車が殆どで、空気はかなり汚染されている感じだ。



モンゴルはでこぼこな未整備な道路を除けば、とても先進的な国に見える。沢山の車やお洒落をした女性が多い。道路は日本、韓国製の中古車で埋まり、渋滞する上に故障が多く、クラクションでうるさい! 乱暴な運転で信号は飾りだ。車道は決死の覚悟で渡る。雨が少なく埃が凄い。その上、寒いので植物は育ちにくい。歩道も穴ぼこで危険だ。



ウランバートルには、人口250万人の半分が住むので、アパートやショッピングセンターが多い。町を見学した帰り道、チェチェングさんと二人で小型バスに乗車した。ワゴン車に、20人以上もの人を詰め込む。次から次と人が掻き分けて乗降する! 古い車が多いせいか、いきなりエンジンがブスブス大きな音を立てる。車は歩道に乗り上げて車掌が方足を車から出して必死に車を漕ぐ。人々はそんな中で、平然と松の実を食べている!



毎日こんな調子だとチェチェングさんは気遣いをするが、昭和30年代の日本も同じだった。

モンゴル市内の「ガンダン寺」ではモンゴ

ル800年祭記念に、ダライラマの訪問を受け、寺の境内のゲルにはダライラマ関連の展示物が陳列されていた。本堂には釈迦の大立像や、小仏像、写真も展示されている。さかんに煙をかけ、熱心に手を合わせるモンゴル仏教徒でいっぱいだ。同じ仏教ととして、親しみを覚えるのも不思議な感じだ。

翌日、ウランバートル近郊の観光地テレルジにドルジさん一家の案内でかけた。ウランバートルの水瓶である



トル川の上流に位置し、川と森林、奇岩、古寺、恐竜の像を見るモンゴルの観光地で有名な所だ。草原には観光ゲルが10棟ほど建っており、日本人の観光客が宿泊していた。モンゴルの8月はもう涼しく、草原の花は終わりだ。それでも少し残ったリンドウ、エーデルワイス、ワレモコウ、ヤマハナス、チゼルの花が。

草原には大きいゲルの中はレストランになっていて、ドルジさんの勧めで昼食を採る。美しい環境のせいか、羊肉が市内より匂いが無く旨い。



テレルジには様々な高山植物や森林には古寺院がある。テレルジは恐竜や観光ゲル奇岩で有名。モンゴルでは最も自然が豊かな地域といわれているが、今年は昆虫が大量発生して、周辺の森が広範に赤く紅葉しているように見えた。被害が大きいようだ。

**血ノ川のチクゴスズメノヒエを除去しました**

10月14日に有志3名により、血ノ川において外来植物のチクゴスズメノヒエの除去を実施しました。血ノ川は絶滅危惧植物のアサザの生育が見られる場所ですが、そのアサザ群落の中にチクゴスズメノヒエが入り込んでいました。チクゴスズメノヒエは繁殖力が旺盛で、西部承水路では広範囲にわたってこの植物が繁茂しています。水路を閉鎖したり、他の浮葉植物等を駆逐したりすることから、増える前に除去するよう監視活動をおこなっています。今回は、群落はまだ大きくなる前に実施できたため、15分ほどの作業で、ほとんどのチクゴスズメノヒエを取り除くことができました。

**第56回河北潟自然観察会**

10月7日、気持ちよい秋空の中、河北潟自然観察会が行われました。今回はこれまでの観察会ではあまり訪れていなかった場所ですが、河北潟から海につながる部分である大野川の堤防の上から、水上の鳥類などを観察しました。ここは、石川県がヨシ原の再生事業をおこなっている場所で、浚渫土を使って浅瀬をつくった場所に、ヨシの生育が確認できました。また、コガモなどのカモ類の飛来も確認できました。

河北潟では最近、水上スキーに似たウエイクボードというレジャーが盛んにおこなわれています。舳先を上げた大きなモーターボートを航行させて強い波をつくるため、湖岸のヨシ原などの植生や、水鳥への影響が懸念されています。

この日も、参加者の目の前を何度も往復するモーターボートがあり、通り過ぎたあとにヨシが激しく揺れている様子が観察されました。

その後干拓地に移動し、オオタカやノスリを観察しました。河北潟自然観察会は、偶数月の日曜日午前9:00よりおこなっています。詳しくは河北潟湖沼研究所金沢事務局まで。

**編集後記**

前号より、潟端の話を見開きページに載せていますが、いかがでしょうか。いま一番力を入れて制作しているコーナーです。

当時の暮らしや自然は現在とは全然違って、お話を伺っていると驚くことばかりです。坂野さんは記憶をたどりながら丁寧に細かいところまで話しをされるので、わたしの頭の中でも想像がひろがってきます。そして、少しでも正確に当時の様子が伝わるよう書き残したいと思うようになりました。聞き取りを始めてから、もうかれこれ4年が経とうとしています。なかなかまとめられずにいました。

今回、舟や櫓などの絵をのせていますが、この絵は坂野さんが描かれました。舟の寸法は、地元で舟を持っている方に協力をいただいて、実際に測っていただいたそうです。櫓と櫓は、津幡町歴史民俗資料収蔵庫にあるとお聞きして計測してきました。また坂野さんは、事実と異なることを記録に残さないようにと、注意しながらご自身で調べられたり、お知り合いの方に確認されたりしています。こちらもお気合いが入ります。これから、少しずつですが書きまとめて、通信に掲載していきますので、よろしくお願いたします。ご感想をいただくと幸いです。

(編集部：N)

